

第4章

3歳以上児の人間関係の育ちと保育

本章のねらい

幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園などの保育の場は、家庭とは異なる、子どもが初めて経験する社会的な集団です。0・1・2歳児の時期に経験してきた人との関わりを基盤として、3歳以上児の人との関わりが広がります。

領域「人間関係」に示されているように、子どもは園生活のなかで保育者や他の職員、周囲の子どもたち、地域の人々と関わり、他者への親しみを感じ、支え合うことを経験しながら、人と関わる力を育んでいきます。

他者との関わりにおいては、仲間と一緒にいることを望む、同じことをして喜ぶ、関わりの楽しさを感じる、協同する喜びを味わう、協力して成し遂げる満足感・達成感を味わうなど、様々な体験を積み重ねていきます。そのなかで、多様な感情を経験し、自分の意思をもち、それらを表現しながら自分という存在に気付き、自立心を育んでいきます。

本章では、実際の保育の場で見られる事例を紹介し、3歳から小学校就学前までの子どもたちの他者との関わり、自己の育ち、保育者の関わりについて学んでいきます。

- ① 3歳児・4歳児・5歳児の人間関係に関するおおよその発達を学びましょう。
- ② 3歳児・4歳児・5歳児の事例から仲間との関わりを確認しましょう。
- ③ 保育の場における事例をもとに、子どもの自己の育ち、他者との関わりについて、保育者の視点から学び、実習などの実践に役立てましょう。

専門的事項

第1節 自己の育ちと人との関わりに関する発達

(1) 3歳児

① 発達の姿

0歳，1歳，2歳の頃には保育者に依存し，保育者を安全基地にして行動していた子どもたちですが，3歳になると次第にはっきりした自我が育ち，独立した存在として行動しようとするようになります。

他者がしていることを観察する力や注意力も育ち，大人の行動をよく見ています。子ども自身が日常生活で経験していることもよく覚えていて，遊びの中に自分が経験したことのより具体的な再現が見られるようになります。これまでの遊びより，より具体的な見立てや，場や状況を作って遊ぶ姿も見られます。

他の子どもへの関心がさらに増し，仲間と一緒にいることを望むようになり，友達がしていることに関心をもって観察して真似するなど，友達の近くで同じことをすること（平行遊び）が楽しい時期です。次第に，遊びや生活のなかで子ども同士の関わりが増え，ものを分けあったり順番を守ったりすることができるようになっていくのもこの時期です。

さらに，遊びの中で簡単なきまりを守ったり，自分から何かを実現しようとする意欲も現れ，保育者の手伝いをしてお礼を言われたり，他者の役に立っていることを喜ぶ姿もよく見られます。

(注意：ここに記載した姿はあくまでも目安です。発達には大きな個人差があります。目の前の子どもの姿を捉えて，その姿を尊重して関わることが重要です。)

② 友達との関わり

この時期の子どもは友達への関心が高まり，友達がしていることが気になり，同じことをしようとするなど，子ども同士の関わりが多くなっていきます。し

かし、相手の気持ちを察したり、友達に合わせて行動することは難しいので、友達が持っているものがほしくなり、取り合いになることもよくあります。

次のエピソードを読んで、3歳児の友達との関わりについて考えてみましょう。

【エピソード4-1】「ぼくがつかってるんだもん」（3歳児）

3歳児クラスの保育室では、登園後、持ちものの片付けを済ませると、ブロックや積み木、ままごとやパズルなどそれぞれ自分で遊びたいおもちゃや道具を取り出して遊んでいます。タケルは赤いブロックだけを集めて、何かを作ろうとしていました。そこにシゲルがやってきて、タケルの近くに座って青いブロックを集め、同じようにブロックを組み立て始めます。2人はときどき目を合わせてにっこりしながら、すぐそばで同じことをしています。タケルはタイヤのパーツを付けて車の形に組み立て、残ったブロックを長くつないで道を作りはじめます。タケルが青いブロックを1つ取ってつなぐと、シゲルが「ダメー」と大きな声を出し、青いブロックを取りあげました。すると、タケルがつないでいた道はバラバラになってしまいました。タケルはシゲルの手を払って、青いブロックを取ろうとしましたが、シゲルが再び「ダメー」と大きな声を出し、タケルをブロックでたたこうとしました。タケルとシゲルは大きな声で泣き始めます。

2人の泣き声を聞きつけて、担任保育者のチカ先生が「どうしたの」と2人のところにやってきました。シゲルは「ぼくがつかってるんだもん」と泣きながら訴えます。

このエピソードからは、友達のしていることが気になり、自分も同じことをして遊びたくなったシゲルの気持ちが読み取れます。タケルもシゲルが近くで遊ぶことを認めて、2人は近くで同じことをする楽しさを感じながら遊んでいたようです。車を作り終えたタケルは、今度は色にこだわらず道路を作り始めました。そこでは、シゲルが青いブロックを使ってほしくなかったことには気

付いていません。シゲルは青いブロックは自分が使っているから「自分のもの」と思っていたのでしょう。それを取られて手が出てしまったようです。たった1つのブロックをめぐってぶつかり合いが起きてしまいました。



写真4-1 ブロックで車を作る（3歳）

（*写真はイメージで事例のものではありません。）

ブロックは本来クラスのもの、みんなのものですが、この頃は自分が遊んでいるものや使っているものは「自分のもの」という意識が強く、それがぶつかり合いの原因になることがよくあります。「自分」という意識（自我）が強くなり、自己主張をしている姿と捉えることもできます。しかし、相手が何をしたいと思っているのか、何をされたらイヤなのかを察することは難しく、自分の思いをとっさに言葉で表現することも難しい時期です。

保育者はそれらのことを十分に理解した上で、まず、双方の子どもの思いを否定せずにしっかりと受け止めます。そして、場合によっては双方の思いをわかりやすく伝える仲介役を担います。さらに、十分なおもちゃや道具の数を用意するなど、環境の改善につなげていくこともあります。

(2) 4歳児

① 発達の姿

3歳の頃より、よりしっかりとした自我が育ち、自分と他者との違いや区別がはっきりと認識できるようになっていきます。

他者から見られていることに気付き、自己意識も芽生えてくる時期です。これまでのようにいつも無邪気に振る舞うのではなく、緊張したり、真面目に取り組んだり、場面によって異なる振る舞いをすることもあります。

自分の思いがあり、それを表現しようとするが増えますが、うまくいかず、つまづきや葛藤を抱えることもあります。

自分の思うようにできるだろうか、という不安やつらさを経験することもあります。このような時に保育者から気持ちを理解（共感）されたり、励まされたりすることで、次の機会には自分が他者に共感して励まそうとしたり、相手の気持ちや立場を思うことができるような感受性が育っていきます。

そして、友達と一緒にいることの喜びや楽しさをより一層感じるようになり、友達とのつながりが強まり、仲間意識も芽生えてきます。その反面、双方に自分の思いがあるので、意見の食い違いやぶつかり合いも起こります。競争意識も芽生えるので、一番を競ったり、悔しい思いをすることもあります。しかし、仲間と一緒にいるときには、少しずつ自分の気持ちを抑えて相手に譲ったり、我慢することができるようになっていきます。

(注意：ここに記載した姿はあくまでも目安です。発達には大きな個人差があります。目の前の子どもの姿を捉えて、その姿を尊重して関わるのが重要です。)

② 子ども同士の関わり

園生活や遊びの中で、友達の思いとのすれ違いやぶつかり合いを経験し、次第に他者の存在や気持ちに思いをめぐらすことができるようになっていきます。次のエピソードを読んで、4歳児の友達との思いの共有や、他者の思いを受け止める姿について考えてみましょう。

エピソード 4-2 色水遊び「混ぜたかったんだよね」（4歳児）

4歳児クラスの子どもたちがテラスで色水遊びを始めました。園庭に咲いている朝顔やホウセンカ、ツユ草やサルビアの花を分けてビニール袋に入れ、手でもんで色水を作ります。みんなで水で薄めて小さな透明のコップに分けていきます。たくさんのコップが並び、「いちごジュースみたい」「これはぶどうね」と、色水をジュースに見立てて、ジュースやさんごっこが始まります。アサミとモエがジュース屋さんになり、ケンタや他の子どもたちが葉っぱのお金を持って「ジュースください」とやってきます。

そこへ3歳児のリクが来て、色水の入ったコップを持とうとしました。アサミとモエに「だまってとったらダメ」「はっぱのお金もってきて」と言われ、リクはその場を離れます。リクは別のテーブルの上にあった色水を見つけると、それを混ぜて遊び始めます。アサミとモエがそれを見て、「あーあ」「汚い色になっちゃった」と怒ったように言うと、リクは困ったような顔をします。葉っぱを取って戻ってきたケンタが「混ぜたかったんだよね」と言うと、リクは「うん」とうなずいて安心したような表情になりました。

友達と一緒に色水をつくることを楽しむ4歳児クラスの子どもたちの様子がわかるエピソードです。色水をジュースに、葉っぱをお金に見立てて、ジュース屋役とお客役に分かれて、遊びが発展していきます。

アサミとモエは同じクラスのケンタたちには色水ジュースを渡しても、葉っぱのお金を持っていない3歳児のリクには色水ジュースを渡しません。2人には色水を混ぜてほしくないという同じ思いもあったようです。そして、色水で遊びたいと思っているリクの思いには、気持ちを向けることができません。一方、ケンタはリクが色水に興味をもって、混ぜてみたかったことを察し、リクの思いを代わりに言葉にしています。実はケンタも1年前にリクと同じような経験をしたことがあったのです。



写真4-2 色水あそび（4歳）
（*写真は事例のものではなくイメージ）

4歳を過ぎると友達と同じイメージをもって遊べるようになっていきます。友達との遊びを発展させたり、協力して継続させようとする気持ちが育っていることが読み取れます。しかし、自分たちの遊びの外側にあることや、他者の思いにまで気持ちを向けることはまだ難しく、自分たちのイメージと異なる思いや行為を受け入れられず、否定したり非難してしまうこともあります。そうした経験をしながら、少しずつ他者のしたいことや気持ちに思いをめぐらすことができるようになっていきます。

（3）5歳児

① 発達の姿

基本的な生活習慣は自立し、日常生活に必要な身の回りのことは自分でできるようになります。自分のことだけでなく、困っている友達や年下の子どもを助けたり、世話をしたりする頼もしい姿が見られることもあります。

自分の好きなことには集中して取り組み、自分でやると決めたことへの意欲や情熱を発揮します。得意でないこと、好きではないことにも少しずつ挑戦できるようになり、人の役に立つことの嬉しさ、認められた喜びや誇らしさを感じ

じるようになります。

この時期、仲間の存在はとても重要です。仲間と過ごすこと、遊ぶことによりお互いに刺激し合って成長していきます。仲間と同じイメージをもって役割分担をしたり、話し合ってきたりを作って守ろうとする姿も見られるようになります。違う意見も受け入れて、自分の気持ちをコントロールしながら1つの目的に向かって仲間と協力することもできるようになっていきます。

行動する前に考えることもできるようになり、他者の不当な言動について「おかしい」「いけない」など言葉で注意したり、批判する力も芽生えます。

一方で、他者の気持ちに気付いたり、思いやりやいたわりの気持ちが育ち、それを言葉や行動にする姿も見られるようになります。

遊びや生活のなかのルールやその必要性を理解して、自分なりに考えて、良いことと良くないことの区別をし、物事の判断ができる基礎が育っていくのもこの時期です。

(注意：ここに記載した姿はあくまでも目安です。発達には大きな個人差があります。目の前の子どもの姿を捉えて、その姿を尊重して関わるのが重要です。)

② 仲間との関わり

仲の良い友達だけでなく、クラスやグループの仲間との関わりをもち、自分の意見を伝えたり、仲間の思いを受け止めて活動することができるようになっていきます。次のエピソードを読んで、5歳児の自己の育ちと仲間との関わりについて考えてみましょう。

エピソード4-3 「動物園がいいね」(5歳児)

5歳児クラス25名のゆり組には5人で構成した5つのグループがあります。グループ活動として、出席人数の報告、野菜や花への水やり、給食や午睡の準備・片付け、担任保育者の「お手伝い」などの当番活動があります。子どもたちは登園するとすぐにそれぞれの活動に積極的に取り組みますが、当番活動を終わるとそれぞれ仲良しの友達と遊び始めます。担任保育者の

カズマ先生は当番活動以外にグループで楽しくできることがないだろうか、と思っていました。ちょうどその時、園長先生から「紙粘土があるから5歳児クラスで遊ばないか」という提案があり、グループごとに粘土を分けて、好きなものを作る活動を提案することにしました。

トンボグループのサヤカはリンゴやバナナを作ります。マイは粘土を棒状にしたものをつなげてドーナツを作ります。ヒロムは何を作ったらよいのか思いつかないようでしたが、マイを見て粘土を紐状にしてヘビを作り始め、途中からワニに変わっていきました。キヨシはかたまりからゾウを作っています。それを見て、マコトはトラを作ることにしたようです。それぞれが好きなように好きなものを作っていました。

しばらくして、カズマ先生が「みんなおもしろそうなものを作っているね。みんなのものを一緒にして何かできたら、もっとおもしろくなりそうだね」と言いました。マコトがワニやゾウを見て「動物園にしようぜ」と呼びかけました。するとサヤカが「果物作ってるからお店屋さんがいいよ」と主張し、マイに「ね、マイちゃん」と同意を求めました。マイは「うん」と小さな声で同意します。するとキヨシが「動物はさあ、果物とか食べるじゃん。餌にすればいいんじゃない」と提案します。するとサヤカが「動物園の中にドーナツ屋さんとか作れば」と言うと、今度はマイが嬉しそうに「うん、動物園がいいね」と言い、トンボグループでは動物園を作る活動になっていきました。

この事例では、前日から当番活動を楽しみにしていて、自分の役割に責任をもって当番活動に取り組む5歳児の姿が見られます。仲良しの特定の友達と遊ぶことが楽しくなっている様子も読み取れます。ここで担任保育者の「いつも同じ友達と遊ぶだけでなく、グループの仲間とも協力して楽しい活動をしてほしい」という願いに、タイミングよく紙粘土が用意でき、グループで活動する機会がもてました。

子どもたちには自分の作りたいものをイメージして形にしようとする力が

育っていますが、仲間が作っているものにも関心をもち、影響を受けたり刺激し合いながら活動している姿も見られます。

動物園にしようとイメージを広げるマコト、お店屋さんにしたいサヤカ、2人の意見を調整しようとするキヨシ、マイの気持ちを察して動物園の中のドーナツ屋さんを提案するサヤカ、自分のしたいことも認めてもらえて嬉しそうなマイなど、子どもたちは仲間と関わりながら、動物園を作っていくことになっていった事例です。



写真4-3 仲間と作った共同作品（5歳）
（*写真は事例のものではなくイメージ）

自分のしたいことや意見を主張する子どもがいるなかで、仲間の意見に押されてしまう子どももいます。主張、我慢、譲り合い、思いやり、嬉しさなど多様な感情を経験し、自分の思いを調整したり、仲間の思いを察したり、折り合いをつけようとする力が育っていきます。仲間の思いと自分の気持ちを交錯させながら、仲間と気持ちが通じ合う嬉しさや楽しさを糧にして、人と関わる力が育まれていきます。

.....参考文献.....

厚生労働省「保育所保育指針」平成29年告示。

厚生労働省『保育所保育指針解説〈平成30年3月〉』フレーベル館，2017年。

厚生労働省編『保育所保育指針解説書』フレーベル館，2008年。

汐見稔幸監修『保育所保育指針ハンドブック2017年告示版』学研，2017年。

第4章 確認問題

1. 3歳児・4歳児・5歳児の人間関係に関する発達のポイントを，自分の言葉でまとめてみましょう。
2. 3歳児・4歳児・5歳児からいずれかの年齢を選び，人との関わりに関する発達を考慮した遊びを考えてみましょう。

演習

筆者は大学附属の幼稚園に13年勤務し、未だ担任をもち現場に立っております。保育現場で、子ども同士の関係性を見ていくと様々なドラマがあります。エピソードを通して子ども同士がどのように関わり合い、言葉を交わし、どう一人一人ドラマを作っていくのかを見ていきたいと思います。

1. いつも『仲良く』とは限らない

エピソード4-4: 「だって、作れなさそうだから」(4歳児)

ある年の4歳児クラスのことです。本園は3歳児から4歳児に進級する際、クラス替えがあり担任も変わります。そのため、4歳児進級時は新しい環境、新しい先生、新しい友達と、子どもにとっては緊張の連続です。これは、どの園でも見られる光景かもしれません。

子どもたちを見ていると、3歳児で友達だった子と一緒に遊んだり、自分の好きな遊びをしたり、何とか安心できる環境を作り出そうとしています。

そんな中、この年度の4歳児クラスはよく遊ぶ子たちでした。特に、男の子は新しい友達と、よく関わって遊んでいます。ただ、「こうしたい!」という思いが強すぎるのか、ぶつかり合うこともしょっちゅうです。

5月を過ぎ、少しくラスに慣れてくると関わり合いも増え同時にイザコザも増えていきます。特に多いのが『物の取り合い』です。どの園でも、またはどの学年でも、この時期はよく見られる光景でしょう。でも、この学年の1学期前半は、勢い余って



手が出てしまうこともあり、内心かなりハラハラしていました。

ある日、積み木で海を作っていたタケルに、ソウスケが「入れて」と入ろうとしますが、「ダメ」「やだ」と一点張りで、どうしても一緒に入りたいたいソウスケと一触即発の状態です。私が間に入って事情を聞くと、「作れなさそうだから」（タケル）とのこと。そして、「今日は教えられないから、明日ならいい」とタケルが伝えると、ソウスケは渋々同意し、他の遊びをしました。

(1) 「今日は教えられない」の意味は

「作れなさそう」この言葉に、思わず笑ってしまいそうになりましたが、タケルの言葉をよくよく考えてみると、色々なことがわかります。もしかしたら、ソウスケのことをよく知らず、一緒にはやりたくなかったのかもしれません。それが「作れなさそう」という言葉に表現されています。

タケルは新しい環境にも戸惑いは感じられず、誰とでも関わっていけるように見えていました。しかし、4月、5月は緊張の連続。担任である私が思っている以上に、緊張をタケルは感じ、ちょっと1人で遊びたかったのかもしれない。

「今日は教えられない」という言葉が示すように、いつも仲良く、いつも楽しく園生活を送れるわけではありません。友達とのぶつかり合い、葛藤、緊張、様々な思いを子どもたちは生活の中で経験します。そんな自分の心の内の思いを、必死に言葉で相手や先生に表そうとしています。

初任者の頃は、なんとか一緒に遊べるように、相手を説得してしまう自分がいました。確かに、「一緒に」とか「仲良く」してもらうのにこしたことはありません。しかし、双方の思いや、進級してからの姿を考えたときに、必ずしも「一緒」にいることが良いことであるとは限らないのかもしれない。

2. 仲良し同士の関係から、保育を考える

(1) いつもの一緒の関係をどう捉えるか

1学期は比較的よく知っている仲間と遊ぶ姿が多く、新しい環境にも慣れた2学期になると新しい友達とも関係が広がり、だんだん関係性が広がっていきます。これは、比較的どの学年でも（程度の差はあれど）見られる姿かと思います。

2学期になり、担任としてだんだん気になってくるのが、関係性が広がらない子の存在です。もちろん、友達と一緒に遊ぶことは良いことです。ただ、よく見てみると特定の仲良しとだけしか遊ばなかったり、他の子が遊びに参加してくることを嫌がったり、仲良しがお休みするとまったく遊びに参加できないこともあります。そんな姿を保育者はどう捉えていったらいいのでしょうか。

【エピソード4-5】「世界を広げていく」（4歳児）

ある年の4歳児クラスでのことです。ヒロトとゴウは何をするのもいつも一緒です。3歳児クラスから2人は同じクラスで、いつも一緒にいた関係です。1学期は進級の不安もあり、一緒にいても担任はあまり気にならなかったようですが、2学期の半ばになってもなかなか関係が広がりません。

それだけでなく、遊びを見ても、ブロックや積み木などいつも同じ遊びが多かったり、後は園内を歩いたり・・・もちろん子どもがやっていることを肯定的に見てあげたいし、園内を歩いているだけで何らかの発見をしているかもしれませんが、しかし、毎日、園内を歩き回るだけでいいのか、と言われるとそうでもないような気がします。

当時、私は隣の年中クラスを担当し、同じ学年だったので、彼らのことはよく話し合いました。11月になり、クラスで動物を作ることが流行り始めました。2人は、もちろん作りません。でも、転機があらわれます。3歳児クラスで一緒だったケン（その時は、私のクラス）は、時々ヒロトとゴウと一緒にいることが多く、そのケンが動物を作り始めたことで、「やってみ

ようかな」と2人の気持ち動き始めたのです。

その時、私と隣のクラスの担任ですぐに言葉を交わし、2人にとっては隣のクラスだけど、この流れで作った方がいいだろうと、私のクラスで空き箱を提供し、作っていました。その後、2人は、皆がやっていることに少しずつ興味を持ち始め、今までやったことのない遊びにも取り組んでいくようになりました。



(2) 関係性の「中身」を見ていくこと

誤解のないように申し上げると、一緒にいることや関係性が広がらないことがダメというわけではありません。色々な遊びに興味を示し、誰とでも関わる子もいれば、自分が好きな遊びに没頭し関係性は狭い子もいます。

ケースバイケースと言えばそれまでなのですが、大事なことはその子（たち）が何をしたいか、何に困っているのか、よく見ることだと思います。特に、4歳児は『自分1人で楽しみたい』思いと、『みんなと一緒にやってみたい』思いが交錯する難しい年齢です。一緒にいるから大丈夫ではなく、一人一人がやりたいことをできているかという視点一つまり、関係性の「中身」を丁寧に見ていくことが必要かと思えます。

さらに、彼ら2人のエピソードのように、一筋縄ではいかない子もいます。彼らをどう見ていいのか、担任も私もずいぶん悩みました。魔法のような方法があるわけではなく、1年という長い目で、試行錯誤しながら保育をしていくことが改めて大事なのではないかと、彼らは教えてくれているようでした。

3. 4歳児で対話をしながら「共有」していくプロセス

園生活に慣れてくると、友達に興味生まれ、一緒にしたくなります。4歳児になると、大人の手を借りずに、自分たちで言葉を交わしながら進めていこうとします。しかし、前述したようにぶつかり合うこともしばしばです。

保育者がどこまで間に入っていくのか、どこまで任せていくのか、4歳児での対応が最も難しいのかもしれませんが、しかし、子ども同士の動きや表情、言葉の機微を丁寧に見ていくと、実は大人が思っている以上に、子どもは相手のことを感じ、自分なりに相手の思いに寄り添っているのではないかと思うようになりました。

ここでは、4歳児がどのように言葉をやりとりしながら、イメージを共有していくのかを見ていきたいと思います。

(1) なんとなく「了解」し合う

進級した1学期はやはり保育者の援助は欠かせないのですが、同じ場にいることとか、同じ物を持っているというのが、『一緒』を感じるキーワードになっていきます。

エピソード4-6① 「場」が拠点となる」(4歳児)

6月のある日、鳥ごっこをしたいという、ニナの声でお面を作り、園庭にダンボールで家を作りました。すると、それを見た子どもたちが、「入れて」と参加してきます。

ダンボールはたくさんあったので、やがて色々な子が参加し、たくさんの家が園庭にできました。お面を作る子もいれば、作らずに参加する子もいました。

最初に始めたニナは、誰がどん



な形で参加しようとまったく気にも留めていませんでしたが、一緒に参加していたサナコは、「お面かぶってないとダメだよ」と言うと、この園庭での遊びは、『お面をかぶる』というのが、何となくのきまりになって遊ばれていきました。

園庭に鳥ごっこの『場』ができたこと、そして『お面』という道具を作れば、その仲間に入れることが、『何となく』ですが共通理解になり、一緒に遊ぶきっかけになりました。さらに、それを決定付けたのはサナコの言葉でしょう。

新しい友達と出会う時には色々なきっかけがあります。遊びに目を向けた時に、『間口が広い遊び』というのが1つのキーワードになります。間口が広いとは、例えば、ままごとコーナーのように仕切られた空間で、役割分担がはっきりしているような遊びは、友達関係が色濃く現れ、まったく知らない子は断られるケースがあります。

また、お店屋ごっこのように『遊び方』や『役割分担』がはっきりしている遊びでは、違うことをすると（例えば、お店屋ごっこなのに、料理をする、本を読み始める等）仲間から指摘されることもあるでしょう。

こういった遊びは、間口が狭い、つまり自由度が狭いだけに、色々な子が参加するといった時に難しいケースがあるように感じます。

間口が広いというのは、エピソードの遊びのように、お面さえかぶればOK、この場所にいれば何となく皆と一緒に遊んでいる感覚をもてる、といったような比較的自由度が高い遊びです。そこで、本を読んでも、ままごとをしてもOKです。自由度が高い（＝何となく一緒にいる感覚）遊びは、子ども同士の関係性がそれほど深くないときには、とても有効かと思えます。さらに、自由度が高いということはそれほど共通項目は多くはない、ということですが、だんだんと言葉のやりとりが増え、イメージが明確になっていきます。

（2）相手と共有したい思いと受け手の存在

2学期になり、子ども同士の関係も広がってきました。すると、自分が抱い

ているイメージや思いを相手に伝えたいと思うようです。子どもたちの会話を聞いていると、「〇〇ってことね」という言葉が頻繁に生まれるようになります。

9月のままごとの様子です。6人の女の子がままごとをしています。サナコが「私、風邪ひいたってことね」と言うと、マホが「ちょっとの風邪だったらすぐに治るってことね」と返します。

この「〇〇ってことね」という言葉は、4歳児（あるいは3歳児から）の2学期から頻繁に見られるようになります。つまり、自分のイメージを相手に伝えたい、共有したいという思いが高まると見られる言葉です。さらに面白いのは、マホはもしかしたら『風邪』をひいてほしくなかったかもしれませぬ。それを『素』に戻って「風邪ひくのはナシ！」と指摘するのではなく、あくまで『役』になりきって指摘している、とも解釈できます。

また、子ども同士の言葉のやりとりが成立している様子を違った角度から見ると、『受け手』の存在が見えていきます。上述したままごとのエピソードでは6人の女の子が参加し、関係性は広がっていますが、まだ関わり始めた段階です。遊びの様子をよく見てみると、マホが色々な子の言葉（ハッキリと相手に向けて発していない言葉=つぶやきも含めて）を聞いて、返しているのです。

今までは保育者が担っていた役割（受け手）を、子どもが担うようになり、子ども同士で遊びや言葉のやりとりが成立していくようになっていきます。

（3）イメージが違ってくる

子どもたちの様子を見ていくと、自由度が高く「何となく」の遊びではなく、だんだんとイメージを共通にしようという思いが高まっています。言葉を受けてくれる子の存在で、言葉のやりとりも活発になっていきますが、互いにもっているイメージがいつも一緒とは限りませぬ。

エピソード4-6② 「お祭りのイメージは？」（4歳児）

同じ4歳児の9月の場面です。ホールで大型積み木を並べて遊んでいました。偶然2人で積み木を持ち上げ「ワッショイワッショイ！」と遊んでいたことがきっかけになり、「そうだ！お祭りしよう！」ということになりました。一緒に遊びたい思いが高まっている子たちの『目的』が明確になった時は、物凄いパワーが溢れています。保育者の手を借りずに、わたあめ作りや紙でハッピーを作り始めています。



そんな中、2人が何やら話しています。ニナがわたあめを作りながら「お母さんでもいい？」と聞いています。お店屋さんとままごとが一緒になることはよくある遊びで、ニナはそれをイメージしていたのかもしれませんが。しかし、サナコは「お祭りでお母さんは変だよ」と返します。自分の意見を否定されてしまったニナはしばらく黙ってしまい、私もどうしようかなと思っていると、その会話を聞いていたゴロウが「えー、そういうのあるよ」と指摘したことで、お母さん役、お父さん役と役割が生まれていきました。

1学期だったら、お祭りという要素が大きく変わるわけではないので、ニナの発言は流されていたかもしれません。しかし、『お祭り』というイメージをもっているサナコは、「それは変だ」と指摘します。今までのように『何となく』のイメージではなく、もっと明確にお祭りというイメージを遊びとして再現したい思いの表れだったと思います。

折り合いという視点から見ると、双方の納得が得られないまま（この場合は、サナコが渋々納得する形になっている）遊びが進んでおり、多少強引ではあります。しかし、ぶつかり合いながらも、この遊びをしたいという子どもたちの思いが表れているようにも思います。

(4) 違う意見から、どう対話していくのか

対話と聞くと5歳児の姿を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、遊びが盛り上がり、仲間同士の関係性が深まってくると、4歳児でも違う意見を聞き入れ、遊びを進めていこうとする姿が出てきます。

違う年度の4歳児ですが、10月の頃のエピソードです。

【エピソード4-7】「子ども同士で対話していく」（4歳児）

クラスでヒグマになってのごっこ遊びが流行しました。お面をつけて、保育室にあったダンボールで一人一人が家を作ります。ヒグマの仲間がどんどん増え、保育室はヒグマのお家でいっぱいになりました。



遊びは日に日に盛り上がり、家を園庭に持っていったり、ホールに持っていったり、色々な遊び方が生まれていきました。そんな時、トシが「ヒグマホールやらない？」と提案しました。ヒグマになってホールに行って、歌って踊りたいということのようです。

クラスの皆に提案すると、みんなもやりたい、とのこと。ただ、ヒグマではなくモグラになっていたユウコが、「だったら、モグラホールもやりたい」と言うと、ヒグマごっこにいちばん夢中になっていたミナトは「モグラはダメ」と反対します。

ユウコや他の仲間は「ホールを分けるのは？」とか「(モグラとヒグマの違いがわかるように) 名前を書くのは？」と色々と提案をするものの、ミナトは受け入れられません。どうやら、モグラの人数が多くなると(実際は、2~3人しかいないのですが)自分たちが追いやられてしまうかもしれないという思いがあったようです。

ミナトは、3歳児の頃からヒグマや動物になりきる遊びが大好きで、進級後もずっと遊んでいました。ヒグマのことや自分の好きなことに対する思いが強く、相手とぶつかってしまうこともありました。

話し合いが長くなってしまったため、一時中断し、ミナトと残りたい子が数人残り、話し合いを続けることにしました。すると、「やっぱり、モグラはイヤだね」「俺たち、ヒグマだから強いんだもんね」とミナトの意見を受け入れてくれます。そんな会話を5人でしていると、「じゃあ、名前を書いたらいいってことにしたら？」と1人の仲間が言うと、「そうだね、それに決定！」と笑顔で言い残し、5人で走って遊びにいきました。



あれだけ反対していたのに、コロッと心が変わったのは何なのでしょう。改めて、今振り返ると“モグラが嫌だった”のではなく、“モグラが嫌だ”と主張することを通して、ミナトなりに自己表現をしていたのかもしれません。そのことを最もよくわかっていたのは、彼の思いに共感してくれた他ならぬ仲間たちでした。

子どもたちが自分の思いを伝えられるように、または相手の思いを聞けるように保育者は援助します。しかし、こういった子どもたちの姿に出会うと、子どもには『自分で進めていける力』があるように感じるのです。

大豆生田(2016)は、子どもたちが遊びこむことで、仲間や道具との豊かな対話が生まれると指摘しています。ポイントは、遊びです。子どもたちが夢中になって遊びこむことで、言葉のやりとりが活発になり、大人が予想もしていなかった仲間同士の関わりが生まれていくのでしょうか。

4. リレーを通して、仲間への眼差しが変わっていく

5歳児では、仲間とすることが特に大事なポイントとして挙げられます。2学期になっていくと仲間同士の対話も活発になっていきます。イメージを共有していくことも、4歳児に比べ上手になっていきます。

(1) 遊びを創っていく

エピソード4-8① 「ダンボールリレー」(5歳児)

ある年の5歳児でのことです。我が園では、プレイデイという運動会に相当する行事が10月にあります。今年の5歳児は、プレイデイの内容を子どもと相談して決めていくことにしました。

子どもたちにどんな内容にしたいか投げかけてみると、まず始めにダンボールリレーという遊びが



アキトから挙げられます。『ダンボールを置いて、そこに穴を開けてバトンを挿して行って・・・』と説明しているうちに、イメージがどんどん沸いてきたようで、『スタートして途中のイスに置かれたバトンを取って、ポールを周り、再度イスにバトンを戻す』。これをダンボールリレーと名づけました。話している途中で、イメージが変わってきたので、ダンボールという題名は入っているけど、ダンボールは出てこないリレーが完成しました。

その他、水飲みリレーというのも挙げられます。園庭からスタートして、保育室まで行き、水を飲んで戻ってくるというものです。無理だろうと内心思っていました、実際にやってみると面白いのです。

この2つの遊びが盛り上がりました。いつもは外で遊ばない女の子もこの遊びがきっかけになり、参加するようになりました。そのうちの1人、ユ

キは外には楽しそうにやって来るものの、ダンボールリレーは走りません。でも、自分でできる役割を見つけて、バトンが置いてあるイスに腰かけて、バトンを渡す人になっていました。担当が、「やりなさい」と強制したわけではありません。参加したい思いをこういう形で表現するのです。

「走るか／走らないか」の世界にはない選択肢です。ユキは玉入れて、『玉が外に出てしまったのを、元に戻す係』も考案しました。

自分たちで作った遊びというのが良かったのか、ユキのこういった姿を誰もとがめず、むしろユキの姿がきっかけになり、ダンボールリレーの遊び方はどんどん進化していきます。

(2) 仲間に認められる経験

9月中旬、それまで候補に挙がっていたのは、〇〇リレー。隣のクラスは玉入れや相撲なども候補に挙がり、遊びの中でやっています。そこに、我がクラスの子たちもリレー系以外の運動に参加するようになります。そこで、脚光をまず最初に浴びたのは、トウマでした。相撲で相手に押されても土俵際で「のこる」んです。



この頃、子どもたちは、走る前から「俺は遅い」とか、「〇〇君は速いから、勝てない」と、自身を過小評価している子が多い時期でした。そして、失礼なことにも相手にも「〇〇君は遅い」など、勝手に過小評価しています。それが、この相撲で覆ります。次々に勝利を収めるトウマを見て「前は弱かったけど、強くなったな」とヨウタロウがつぶやきます。

この相撲がきっかけになり、トウマは毎日、外でリレーや相撲に没頭していきます。4月はリレーでチーム分けをしても「絶対負ける」「俺、遅いもん」と走る前から弱音を吐いていた姿は、もうありません。友達に認められ、遊びに

没頭していくことで、自信がついていったように感じます。

(3) 自分の思いを主張し始める

リレーや相撲という遊びがきっかけになり、トウマのように自己肯定感が高まった子たちがこの時期増えていったように思います。すると、安心して自分を主張し始めます。思ったことを、どんどん言えるようになります。

エピソード4-8② 「相手を思いやることからルールが生まれる」(5歳児)

9月の下旬、通常スタイルのリレーが流行り始め、今後のリレーの遊び方が変わる1つの出来事が起こります。自分のチームのユウトが転ぶと、ソウタが、「ちょっとストップ!」と大声でリレーを止めました。すると相手チームの子は、「なんでだよ!」と食ってかかります。

ソウタ「だって、転んだから遅くなって負けるもん」

相手チーム「いいじゃん、それでも」

ソウタ「よくない!」

相手チーム「それが、リレーだよ!」

ソウタ「それじゃあ、面白くない!」

それは、凄い剣幕でした。今までそんなに思いを言わなかったソウタの発言だっただけに、その場にいた子たちが真剣に様子を見ていまし

た。「それがリレーだ!」と相手チームの子が言うように、通常は転んでも中断はしません。でも、ソウタは自分勝手にルールを変えようとしているのではなく、転んだ子の気持ちに寄り添おうとしているような気がします。



そして、この日を境に誰か転んだりすると、リレーそっちのけで転んだ子を介抱するようになりました。9月の頭は、誰かが転んでも誰も行きませんでした。むしろ、誰も気付いてもいませんでした。それが、勝ち負けそっちのけで、どっ

ちがリードしていても、中断し、それに対して、誰も文句は言いません。中断するというルールができた訳ではありません。『それじゃあ、楽しくない』とソウタが発したように、勝ち負けよりも大事なことに子どもたちは気づき始めたのかもしれない。

(4) 1人の悩みを皆で考える

その日を境に、子どもたちがよく話し合うようになりました。そして、『自分が勝つ』ことだけでなく、相手のことを気にしていくようになったように感じます。

エピソード4-8③ 「1人の心配をみんなが考える」(5歳児)

プレイデイの前日、ユキが「私は走らない」と言い出します。その前も同じようなことがあったのですが(その時は、お母さんが見てくれたら走れる、とのことだった)、今回は「私は遅いから、みんなに迷惑がかかる」とのことでした。

このことを皆に言ってほしいといわれ、クラスで相談しました。すると、「一緒に走ったらいいよ」とか「練習すれば速くなるよ」と意見が挙がります。練習するといっても本番は明日です。あまり現実的ではありません。

一緒に走るというのは、ユキも安心したようで、「ナナとサユとだったら走れるかも」とユキがつぶやきます。ナナとサユは、ユキが泣いたり不安を抱いていると4歳児の頃から手を握ってあげたり、何かと気にかけている間柄でした。2人も「いいよ!」と同意しますが、他の子から「3人で走ると遅くなっちゃわない?」という意見が挙がります。すると、「じゃあ、前の方にして、アンカーはソウタだから絶対大丈夫だよ!」という声が挙がります。

その日の午後、ユキとナナ、サユに加えサクラとミユウの5人の練習が始まりました。すると3人だとバトンを誰が持つかなど研究を重ね、サクラも自分のことのようにアドバイスを送ります。ユキも「3人なら走れる

かも！」と安心したようです。

私とその場を離れても練習を続け、しばらくすると「せんせーい！」と大声でアイがやってきます。「どうした？」と聞くと、「ユキが1人で走ったよ！」と報告に来てくれました。「1人で走れる顔してたから、走ったら？って言ったら、走れたんだ！」とまるで、自分のことのように教えてくれました。

当日を迎えリレーが始まる直前まで、ユキを扶むようにアイとサユが座ってくれます。でも、笑顔で「私、1人で走れるかも」とユキが言います。「本当に？」「大丈夫？」と心配する2人をよそに、予想外にユキは満面の笑みでした。

アイとサユは違うチームだったので、一足先にリレーで走りました。ユキのチームの番になり、いよいよユキにバトンが回ってこようとした10秒ほど前だったのでしょうか。アイがパッとユキの元に走りよりました。走る直前だったので、「え？どうした？」と内心思いましたが、アイとサユは最後の最後まで、ユキが1人で走れるか確認しにいったのです。ユキは無事に走ることができ、満面の笑みでリレーを終わることができました。



(5) 『自己充実』と『仲間からの信頼の循環』が、心の対話を育む

リレーという遊びに没頭していくことで、対話が活性化し、仲間への見方が変わっていきました。紙面の都合上、書ききれないエピソードがたくさんあるほど、この年の5歳児のリレーはドラマが満載でした。

その背景には、トウマのエピソードに象徴されるように、一人一人が仲間や先生に認められ充実していることが挙げられます。「③1人の心配をみんなが考

える」で、さらっと書きましたが、「じゃあ、前の方にして、アンカーはソウタだから絶対大丈夫だよ！」と、仲間から全幅の信頼を集めているソウタ。勝負に並々ならぬ思いがあり、以前は負けると泣いて物に当たってしまうこともありましたが。彼が大きく変化したのは、こうやって仲間から認められたことがきっかけでした。負ける経験もたくさんしました。そのたびに、抜けてしまうこともありました。でも、こうやって仲間から信頼され、『粘り強さ』が芽生えていきました。

こうやって見ていくと、『自己充実』と『仲間からの信頼』の循環が大事なのかなと思います。“やってみたいけど、ドキドキする”そんな葛藤を乗り越えたり、意見を言えるようになったり、負けても粘り強く取り組むようになること（自己充実）。すると、仲間が認めてくれたり、あるいは「やろう！」と言った時に呼応してくれたり、困ったら助けてくれる（仲間からの信頼）。

言葉のやりとりだけでなく、仲間関係が充実してくる5歳児にとっての対話とは『心のやりとり』も含んでいるのかもしれない。

・・・・・・・・引用・参考文献・・・・・・・・

大豆生田啓友編『「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語—子ども主体の保育の実践と環境』学研プラス、2016年。

第4章 演習課題

1. いつも一緒に仲良く遊んでいる2人組の子がいる場合、あなたなら2人組の何を見ますか？ 考えてみましょう。
2. もし、あなたの友達同士が言い合いをしている場合、どうやって仲裁に入りますか？ 具体的に思い描き考えてみましょう。